

「そのことです。前の人は手が閉じていたので、広げるのが基本であると教え、後の人は[B]と申したのだ。」ということでした。仏があらゆる人々の生まれもった性質に対応してさまざまな法をお説きになったのも、みなこのようなことです。連歌も、あまりにもどうということのない人には、思案して句を詠むのがよいというべきです。[C]には、思案しないほうがよいと教えるべきです。

* 連歌Ⅱ二人以上で、和歌の形式の上の句(五・七・五)と下の句(七・

七)を互いに詠み続けていく詩歌の一種。

ヒント

「前の人」に教えた内容と比べながら訳そう。「…ので、…だ(である)」という形で訳す。

□(5)

[C]にあてはまる最も適当な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思いついたまま口に出す人

イ 深く考えすぎてしまう人

ウ 考えが足りずよくまちがえる人

エ 気持ちが落ちこんでいる人

★□(6)

次の中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 蹴鞠を教える際には、人それぞれの持ち味を生かした指導を心がけ、むやみに直すことを考えてはいけない。

イ 人に技術や知識を教える際には、その人特有のものの見方や考え方を捨てさせ、一から教え導くことが重要である。

ウ 仏の道を教える際には、まず自分の長所、短所を自覚させ、先生の教えに忠実に従う心構えをもたせなければならない。

エ 人に何かを教える際には、人それぞれの性質に合わせて、助言する内容を変える工夫(くふう)することが大切である。

《重要語句》意味を確認しておこう。(数字は文語文中の行数)

4 おほす(仰せ) 8 よろづ

「」

1 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。(静岡・改)

〈文語文〉

* もろこし^②楚^そ国の王と宋^{そう}国の王と合戦あり。楚^そ国の王戦ひ負け^①て逃げたまへるを、敵^③追ひかけ、すで^④にうち殺さんとする時、喜陵^⑤といへる下臣あり。この人九つの鈴^{すず}を手玉にとることが、天下無双^{むさう}の上手なり。急ぎ主君の馬の後へ馳^はせふさがり、防ぎ戦ふといへどもかなはず。さるほどにかの九つの鈴をとり出し、^⑥色々さまざまに手玉をとりければ、敵どもこのよしを見て、あらおもしろと見物して、^⑦楚王を追つかけたてまつらんことを、はたとうち忘れける間に、^⑧楚王逃げのび危^{あや}ふき命助かりたまふ。

(如備子「可笑記」による)

〈口語訳〉

中国の楚国の王と宋国の王が合戦をした。楚国の王が戦って負けてお逃げになるのを、敵が追いかけて、今まさに殺そうとする時、喜陵という家来がいた。この人は九つの鈴でお手玉をすることが天下に並ぶものがないほど上手だった。喜陵は急いで主君の馬の後へかけつけ立ちふさがり、敵を防いで戦おうとし、たがでなかった。そうしているうちにあの九つの鈴をとり出し、色々にお手玉をしたので、敵がこの様子を見て、ああおもしろいと思物して、楚の王を追いかけることを忘れた間に、楚の王は逃げのびて危ない命がお助かりになった。

* もろこし＝中国のこと。

* 楚・宋国＝ともに古代中国の国の名。

□(1) 頻出 ― 線①「戦ひ」、― 線③「追ひかけ」、― 線⑤「いへる」、― 線⑦「かなはず」をそれぞれ現代仮名づかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

① _____ ③ _____
⑤ _____ ⑦ _____

□(2) ― 線②「逃げたまへるを」とは、どのような意味か。口語訳中から十字以内で書き抜きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

□(3) 頻出 ― 線④「うち殺さん」、― 線⑥「防ぎ戦ふ」、― 線⑧「とり出し」、― 線⑨「見物して」の中で、主語が喜陵であるものをすべて選び、番号で答えなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

□(4) 文語文中から、「。」でくくることのできる部分を一か所探し、書き抜きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--



★
□
(5)

——線⑩「楚王逃げのび危ふき命助かりたまふ」とあるが、そのようになったのはなぜか。その理由を、喜陵がしたことを含めて五十文字以内で書きなさい。

□
(6)

原文では、このあとに、この話の内容についての筆者の感想が記されている。その感想はどのようなものであると考えられるか。次から、最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。
ア 迷いの心を持って名誉や利益を得たいと願い続けると、このようなことになってしまうのだ。

イ 何の役にも立たないと思われることでも、時によっては大事なことに関与する場合があるのだ。

ウ こういう悪い時代に生まれ合わせたことで、こんな嫌なことでまで見なければならなかったのだ。

エ 以上のような特技は一度では獲得しにくいので、指導を受けるながらだんだんと身に付けていくべきだ。

「
」

2

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

(福井・改)

ある時、水辺から離れて困っていた竜が、通りかかった人間に「金を払うから水辺まで連れて行ってくれ。」と頼んだ。人間が竜を馬にくくり付けて水辺まで運び、約束通り金を受け取ろうとしたが、竜は「馬にくくり付けて痛い思いをさせて、さらに金をくれとは何事だ。」と言い、口論になった。そこに一匹の狐が現れた。以下は、それに続く文である。

〈文語文〉

狐、来たりて、「さても竜殿は、何事をあらそひたまふぞ。」
① といふに、竜、右のおもむきをなむいひければ、狐、申しけるは、「われ、このあらそひを決すべし。さきにくくり付けたるやうは、いかにしつるぞ。」といふに、竜、申しけるは、「かくのごとし。」
② とて、また、馬に乗るほどに、狐、人に申しけるは、「いかほどか締め付けらるるぞ。」といふほどに、「これほど。」
③ とて締めければ、竜のいはく、いまだそのくらあなし。したたかに締められけるといへば、「これほどか。」
④ とて、いやましに締め付けて、人に申しけるは、「かかる無理無法なるいたづら者をば、もとの所へやれ。」
⑤ とて追ひ立てたり。人、げにもとよろこびてもとの畑におろせり。その時、竜いくたび悔やめども、甲斐なし。

〈口語訳〉

(「伊曾保物語」による)

狐が、やって来て、「ところで竜殿は、何事を争いなさるの1

か。」と言うと、竜は、これまでの事情を言ったので、狐が、申すには、「私が、この争いを解決しよう。先ほどこくり付けた方法は、。」と言ったところ、竜が、申すには、「このようにだ。」と言って、また、馬に乗ると、狐が、人に申した5ことには、「どれくらい締め付けなされたのか。」と言うと、「これくらい。」と言って締め付けたところ、竜が言うには、まだその程度ではない。しっかりと締められたと言うので、「これくらいか。」と言って、ますます締め付けて、人に申したことは、「このような無理無法ないたずら者を、もとの所へやれ。」と言って追いついた。人は、なるほどと喜んでもとの畑におろした。そのとき、竜は何度も悔やんだが、どうしようもなかった。

- (1) 文語文中に、「」で示されている部分のほかに、竜の会話文がもう一か所ある。その部分を探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

- (2) — 線①「いかにしつるぞ」の意味として口語訳のにあてはまる最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア どのようにしたのか イ だれ 誰がしたのか
ウ どこでしたのか エ なぜしたのか

「」

- (3) 頻出 — 線②「締め付け」、— 線④「締め付け」は誰の動作か。次から適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 竜 イ 狐 ウ 人間 エ 筆者
② 「」 ④ 「」

- (4) 頻出 — 線③「くらゐ」を現代仮名づかに直し、すべてひらがなで書きなさい。

「」

- (5) — 線aとdの「ほど」の中で、意味が他と異なるものをつ選び、記号で答えなさい。

「」

- ★□(6) 竜と人間の口論に立ち会った狐は、どのようにして口論を解決したか。話の流れに沿って、四十字以内で説明しなさい。

《重要語句》意味を確認しておこう。(数字は文語文中の行数)
10 げに

特集

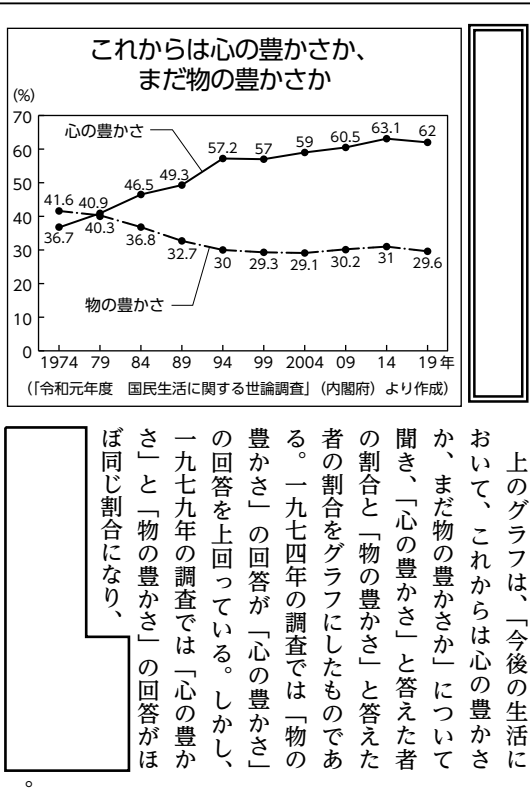
資料の読み取り①

表・グラフの読み取り

↓ 解答
P.27

1 次の【新聞記事】を読み、あとの問いに答えなさい。

【新聞記事】



(1) [] にあてはまる言葉を、「一九九四年以降」という言葉を用いて書きなさい。

(2) [] にあてはまるこの記事のタイトルのとして、最も適当なものを選べ。記号で答えなさい。

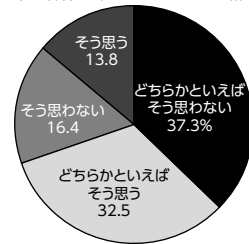
- ア 重視される心の豊かさ
イ 心の豊かさとは何か
ウ 物質重視、若い人に影響
エ 見直そう、古い物のよさ

基礎力養成編

2 次の【資料】と、それに関する対話を読み、あとの問いに答えなさい。

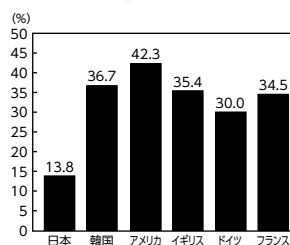
【資料1】

自分の考えをはっきり相手に
伝えることができる
(日本の若者に対してのアンケート結果)



【資料2】

自分の考えをはっきり相手に伝えることができるという質問に対して「そう思う」と答えた割合



(内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)」より作成)

弓子(ゆみこ)博士(ひろし)は、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」という質問に対する、日本の若者の回答の割合を示したもののよ。[A]という回答は、最下位になっているわ。

【資料2】は、【資料1】の質問に対して [A] と回答した人の各国の割合だね。

日本の割合は他の国に比べて、[B] になっているわ。特に、アメリカとの差が大きいわ。

日本の若者は他の国の若者と比べて、[C] と考えられるね。

(1) [] A・Bにあてはまる言葉を、それぞれ書きなさい。ただし、二つのAには同じ言葉が入る。

A

B

(2) [] Cにあてはまる言葉を、文章中の言葉を用いて書きなさい。

特集

B 問題

P. 82 ~ 84

- (2) 口語訳には「もう稲刈りとなり」あつという間のことだなあと感じ入ってしまう。」とある。「あはれ」は、しみじみ感じ入ること。ここで筆者が感じ入っているのは「季節の移ろいの速さ」である。
- (3) 文語文では「いかでさすらむ。穂をうち敷きて並みをもをかし。」とある部分で倒置表現になっている。「さすらむ」が指しているのは、あとにある「穂をうち敷きて並みをもをかし」である。ここに対応する部分を口語訳から探すと、「穂をずらつと敷いて(男たちが)並んで座っている」とある。
- ・「男たち」という、「誰が」にあたる内容と、「穂をずらつと敷いて並んで座っている」という、「どうしている」にあたる内容がない。
↓×
- ・文末が「……こと。」になっていない。↓△

- ① (1) 川上をきはめん
・汝は何の用にたづぬる

- (2) (1) 川上をきはめん
・汝は何の用にたづぬる
- (3) (2) 汝は何の用にたづぬる
・ここは天の川のはじめの津なり。源に至るは難し(順不同)
- (4) (3) 汝は何の用にたづぬる
・ここは天の川のはじめの津なり。源に至るは難し(順不同)
- (5) (4) 汝は何の用にたづぬる
・ここは天の川のはじめの津なり。源に至るは難し(順不同)

- (6) (5) 汝は何の用にたづぬる
・ここは天の川のはじめの津なり。源に至るは難し(順不同)
- (7) (6) 汝は何の用にたづぬる
・ここは天の川のはじめの津なり。源に至るは難し(順不同)

- ② (1) ゆうべ
(2) 過ぎさずに
(3) 鹿
(4) 勢子
(5) 和泉式部
(6) 鹿
(7) 和泉式部

- (8) (例) 鹿が、今夜が自分にとって最後の夜だということを感じ取って、悲しげな声を出すこと。

- ① 「黄河」の「源」を探し当てようとしていることをおさえる。

重要語句

- (2) 頻出 一つ目の織女の会話は、張騫の、「ここは何という所か」という問いに対する答えである。もう一つは、二文にわたるので注意する。
- (3) 頻出 歴史的仮名づかいの「ゑ」は、「え」に直す。
- (4) 頻出 ③ 張騫は、織女の言葉を聞いて驚いたのである。
- (5) ⑥ 「天を仰ぎ見て」言った人を答える。
- (6) 黄河の源まで行こうと、いかだで三年余りも河を上ってきたというのに、まだ天の川の最初の船着き場だということを織女から聞き、あきらめて戻ったのである。
- ・織女から聞いたこととして、「今いる場所は天の川の最初の船着き場」、「源まで行くのは難しい」という二つの内容がない。↓×
- ・「織女」「船着き場」という二つの言葉を用いていない。↓×
- ・文末が「……から。」「……ため。」など、理由を表す形になっていない。
↓△
- (6) 「あやしき星」があったのは、「張騫が天の川に至った夜」とある。「織女星」が織女だとすると、「織女星」のそばにある「あやしき星」は、張騫のことだとわかる。

- 難し…難しい。困難だ。「はなはだ難し(とても難しい)」。● こよひ…今夜。「こよひの月(今夜の月)」。

- (1) 頻出 語頭以外の「はひふへほ」は「わいうえお」に直す。
- (2) 口語訳から対応する部分を探す。どちらも山の鹿の行動を表す。
- (3) 頻出 ③ 山から「下りて」くるものである。

- (4) ⑤ 鹿を追いつく人である。
- (5) ⑦ 「鹿の音」を聞いて、歌を詠んだ人である。
- (6) 文語文中で省略されている語を答える。鹿を狩りにきている状況から、とりかこむ対象は鹿だとわかる。

- (7) 「かの国に……射とる。」を指す。
- (8) 和歌の「今宵ばかりの命と思へば」の部分の内容をとらえる。「思へば」の主語は「鹿」。「今宵ばかり」の「ばかり」は「…だけ」の意味なので、「今夜までの、今宵限りの」という意味になる。鹿が悲しげな声で鳴く理由について、納得しているのである。

- ・鹿が「悲しげな声を出す」とこと、「今夜が自分にとって最後の夜だ」ということを感じ取って」という理由がない。↓×

重要語句

- ・鹿が鳴く理由として、命に関わる内容が書かれていない。↓△
 ・文末が「……こと。」になっている。↓△
 (7) 「保昌、歌に感じ入り、その日の狩をとどめたまふ」とある。

●かの…あの。「かの寺へ参らむ。(あの寺へ参ろう。)」 ●いかで…どうして
 「いかでさる事知りしぞ(どうしてそのようなことを知っているのか)」

漢字・語句

6 熟語の組み立て

P. 85

① ウ・ク

② オ・カ・キ (それぞれ順不同)

③ 無 ④ 不 ⑤ 非

⑥ 未 ⑦ 無 ⑧ 未

② ウ・エ・オ・ク (順不同)

③ エ ア (2) (3) ウ

④ ア (2) (3) ウ

⑤ エ (2) (3) ウ

⑥ エ (2) (3) ウ

① ウ「夜の空」、ク「新しい年」と考える。

② 二字十一字か、一字十二字か、一字十一字十一字かに分けて考える。

③ 反対の意味の漢字を重ねたものを選ぶ。

④ 「国宮」は上が主語で下が述語。「ゝが…」と読めるものを選ぶ。

⑤ 「就職」は「職に就く」という関係で、上の字が動作を示し、下の字がその目的・対象を表している。

⑥ 似た意味の漢字を重ねたものを選ぶ。

⑦ 上の字が下の字を修飾するものを選ぶ。

⑧ 似た意味の漢字を重ねたものを選ぶ。

⑨ 「乗車」は「車に乗る」こと。上の字が動作を示し、下の字がその目的・対象を表している。

⑩ 「腹痛」は「腹が痛い」こと。上が主語で下が述語。

⑪ 一字十二字で上の一字が下の二字を修飾するものを選ぶ。

⑫ 二字十一字で上の二字が下の一字を修飾するものを選ぶ。

⑬ 一字十二字で上の一字が下の二字を打ち消すものを選ぶ。

15 古典 (3)

A 問題

P. 86・87

(1) ① おしえたまいし ④ てもちよう

(2) ア

(3) ウ

(4) (例) 手が広がっていたので閉じることが基本である

(5) エ

(6) イ

(1) 頻出 ① 「へ」と「ひ」の二か所を直す必要がある。

④ 「au」と発音する仮名で書かれているものは「ou」と読むので、「やう」は「よう」となる。

(2) 頻出 「承り」の主語は筆者である。ア・イ・エの主語は、難波の三位入道。

オの主語は、仏である。

(3) 次の日には、違う人に別のことを言ったのである。

(4) 「前の人は手が閉じていたので、広げるのが基本であると教え」だが、「後の人」の「手」は広がっていたため、前の人とは逆に、「手」を閉じるこ

とが基本になるということをとらえる。

・「手が広がっていた」「閉じることが基本」という内容がない。↓×

・「基本」という、「本」の訳にあたる内容がない。↓×

(5) 「沈みたらん人」の口語訳が入る。「沈みたらん人」には、「案ぜぬがよき」と教えて、「あまりにどこともなからん人」には、「案じたるがよき」と言っ

ているところから、「沈みたらん人」は、「あまりにどこともなからん人」と逆の性質の人だということがわかる。

(6) 蹴鞠の話から始まり、仏の教えや連歌の話に及んでいるが、いずれも、その人の生まれもった性質に合わせて教え方を変えることが大切だ、とい

うことを伝えている。

●おほす…おっしゃる。「されば、とおほす(それならば、とおっしゃる)。」

●よろづ…たくさん。さまざま。「竹を取りつつ、よろづのことに使ひ

けり(竹を取っては、さまざまなことに使っていた)。」

重要語句

●おほす…おっしゃる。「されば、とおほす(それならば、とおっしゃる)。」

●よろづ…たくさん。さまざま。「竹を取りつつ、よろづのことに使ひ

けり(竹を取っては、さまざまなことに使っていた)。」

①

- (1) ① たたかい ③ おいかけ
⑤ いえる ⑦ かなわず

(2) お逃げになるのを

(3) ⑥ ⑧ (順不同)

(4) あらおもしろ

(5) (例) 喜陵が九つの鈴のお手玉で色々な芸をするのに見とれて、た敵が、楚王を追いかけることを忘れたから。

(6) イ

(1) いまだその り められける

(2) ア

(3) ② ウ ④ イ

(4) くらい

(5) b

(6) (例) 竜と人間の両方から話を聞いて、竜をもう一度馬にくくり付け、もとの畑にもどした。

①

(1) 頻出 語頭以外の「はひふへほ」は「わいうえお」にする。

(2) 「逃げたまへるを」の主語は「楚国の王」。口語訳から対応する部分を見つけて出す。

(3) 頻出 ④「うち殺さん」の主語は「敵」、⑨「見物して」の主語は「敵ども」。

(4) 敵が声に出したと思われる部分である。

(5) 「敵どもこのよしを見て、あらおもしろと見物して、楚王を追つかけてまつらんことを、はたとち忘れける」の部分が理由にあたる。

「このよし」の内容も具体的に書く。

・喜陵のしたこととして、「九つの鈴のお手玉でいろいろな芸をした」という内容、楚の王が逃げのびた理由として、敵が(喜陵のしたことを見て)楚の王を追いかけることを忘れた、という内容がない。

↓ x

・喜陵のしたことについて、「九つの鈴のお手玉」など、具体的な説明がなく、不明瞭。↓△

・「敵」にあたる内容がない。↓△

・文末が「……から」「……ため」など、理由を表す形になっていない。↓△

↓△

(6) 喜陵は、九つの鈴でお手玉をするのが上手だったが、これは何かの役に立つというものではない。しかし、王が、追いかけてきた敵に殺されそうになったとき、九つの鈴でお手玉をして敵の目を引きつけることで、王の命を救うことができた。このことから読み取れることを考える。

②

(1) 会話文の前後に、「竜のいはく」「といへば」とある。

(2) 「いかに」は、「どのように」「どう」という意味の語。

(3) 頻出 ② 狐に「どれくらい締めめたのか」と聞かれた「人」が、「これくらい」と言っているためである。

④ 竜が「しっかり締められた」と言うので、狐は「これくらいか」と言っています。締め付けたのである。

(4) 頻出 歴史的仮名づかいの「ゐ」は、「い」に直す。

(5) a, c, dの「ほど」は、「……くらい」という意味。bの「ほど」は、「……しているうちに」「……すると」という意味。

(6) 狐がしたことをまとめる。狐は、まず、竜に、どのように馬にくくり付けられたかを聞き、次に、人に、どのくらい竜を締め付けたのかを聞いた。そして、竜をしっかりと馬に締め付けてしまうと、人に、もとの所へもどしに行かせた。

・竜と人間の両方から話を聞いた」という内容と、「竜をもう一度馬にくくり付け、もとの畑にもどした」という二つの内容がない。↓

x

・話の流れに沿う書き方をしていない。↓x

《重要語句》

●げに…なるほど。本当に。「聞きしに勝り、げに美し(聞いていた以上に、本当に美しい)。」

P. 91

① (例) 一九九四年以降は「心の豊かさ」の回答が「物の豊かさ」

の回答を三十三パーセント近く上回り続けている。

② (1) A

(2) (例) 自分考えを相手伝えることが苦手である

(1) A (例) 少ない

① (1) 「一九九四年以降は「心の豊かさ」の回答が六十パーセン

ト前後、「物の豊かさ」の回答の割合が三十パーセント前後を推移し、
二つの項目の差が三十パーセント(三割) 近くも開いたままであるこ
とをおさえる。

・「一九九四年以降は「心の豊かさ」の回答が『物の豊かさ』を上回っ
ている」ことについて、数値などを入れながら具体的に書いていな
い。→×

・前の内容につながらない。→×

・「一九九四年以降」という言葉を用いていない。→×

(2) 【新聞記事】では、グラフをもとに、これからは「心の豊かさ」か、
まだ「物の豊かさ」かを話題にしている。「心の豊かさ」と回答する

人の割合が増えていることから、Aが合う。

(1) A 【資料1】で最下位になっている項目は、「そう思う」である。

B 【資料2】で日本の回答の割合は、他の国に比べて少ない。

(2) 【資料2】を見ると、「自分の考えを相手伝えることがで
きる」という質問に対して「そう思う」と答えた日本の若者の割合は、
他の国の若者と比べて少ないことがわかる。よって、日本の若者は「自
分の考えをはっきり相手に伝えること」が苦手であるということが読
み取れる。

・【資料2】から読み取れる日本の若者の特色について書かれていな
い。→×

16 説明文・論説文(5)

A 問題

P. 92・93

(1) a 隠しきろう b 自然らしく c 左右対称

(2) (例) 自然に働きかけ、共に生きていく努力をしてきた(から。)

(3) 工

(1) 日本の庭園の特徴について述べられた、第三・第四段落の内容を読み取る。

(2) 日本ならではの自然美について、前の段落に、「それが結果的に、日本
独特の自然の美を生んできたのだ」とあることをおさえる。「それ」が指
す内容は、「自然に対して常に働きかけをして、共に生きていく努力を惜
しまない」という、日本人の自然に対する姿勢である。この内容をまとめる。

・「自然に働きかける」「(自然と)共に生きていく努力をしてきた」とい
う二つの内容がない。→×

・文末が「……から。」に続く形になっていない。→×

(3) 頻出 西洋の庭園と日本の庭園を比べることによって、「日本人の自然観」
を明らかにし、日本人が土地の「素質」を生かして「独自の自然美」に育
て上げてきたことを述べている。

重要語句

● 制御：おさえつけて、思い通りにする。「あせ焦る気持ちを制御する。」

● 緻密：きめこまやかな様子。「色使いの緻密さに目をみはる。」

B 問題

P. 94・96

(1) A

(2) 自然からの制約を排除し、自然を取奪の対象としたこと

(3) (例) 自然とは人間の地位よりも一段低く、人間の手を加えないと無
価値なものであるという自然観。

(4) (例) われわれがすべての生物と等しく自らの力で生まれ育ち死んで
いく点で自然であり、同時に自然の操縦者でもあるということ。

(5) 環境問題が、起きていること